旭島　翁島　千貫島　經の島

猶此外船頭色々の島をさして教へしかど、書しるすまに船行過て、四方の景色を見洩さじとするに、心のいとまなくして十分の一もしるし得ず、八百八島有りと云、誠に數百に餘れりと思ふ、鹽竈の千賀の浦より、松島迄二里半の間、泉水の如く海亦甚深からず、五六尺或は七八尺計に見えて、底甚明なり、かくの如く、島の間皆入海なれば、風ありといへども波立事なしといへり、此島島の松皆赤色にして枝皆下に垂れ、作れる松の如し、故に其景色艶美にして猛からず、扨舟を雄島に付て上り見るに、雄島頗る大なり、此島は見佛禪師の座禪の地なり、其堂宇今に連れり、島の南邊に高さ一丈に餘れる碑有り、元の僧寧一山鎌倉建長寺に住持せし時、見佛禪師の爲に書する碑にして、字體は草書なり、苔封じて文字見がたき所多し、世の人石摺にして珍重する石碑なり、其外此雄島には芭蕉の朝な夕なの吟をはじめ、俳諧者流の發句の碑、或は騷人の詩碑等甚多し、然れども此佳景に對すべき作は有ぬとも覺へず、扨雄島見めぐりて大なる橋を渡り、他の島にのぼり、又其島より橋にて松島に渡る、今松島と名付る所は陸地にて町家軒を並べたり、多くは皆旅館なり、松島の町耕作の地少ければ、農人にもあらず、又此地は瑞巖寺の下にて殺生禁制の所なれば漁獵の者にもあらず、他の街道にあらざれば商家にもあらず、大かたは只松島の景色遊覽の人を宿して、渡世とする事なり、

〔袖中抄十七〕うるまの玄ぢ

おぼつかなうるまの島の人なれや
我ことの葉を玄らぬがほなる

顯昭云、これは公任卿の歌也、うるまの島の人の、こゝにはなたれて、こゝの人の物云を、聞もしらでなんあると云比、返事せぬ女につかはしける也、